

研修名	令和6年度 埼玉県東部公立小中学校事務職員研究協議会 全体研修会		
実施日時	令和6年5月8日(水) 13:40~15:10	会場	越谷市中央市民会館
講師	日本赤十字社埼玉支部 越後 隆 様	参加者数	162名
13:40- 開会行事	<p>東部教育事務所長 三田様より</p> <p>現在学校には不登校児童生徒の急増やいじめの問題、教職員の働き方改革など様々な課題がある。これらの課題解決に向けて取り組むにあたり、学校事務職員も児童生徒や教職員を支え、教育活動と学校運営のバランスを図る、重要な役割を担っている。教職員と連携し、質の高い教育環境作りに尽力していただきたい。</p> <p>埼玉県公立小中学校事務職員研究協議会会長 浅野様より</p> <p>本日は東部事務研全体研修会、総会の開催おめでとうございます。埼事研の事業につきまして、日頃よりご協力ご支援いただきまして感謝しております。今後も多くの事業が行われますので、ぜひご参加いただき自身の研鑽を深めていただきたい。</p>		
14:00- 講演	<p>演題「災害への備え」</p> <p>日本赤十字社埼玉支部 越後隆 様</p> <p>〈セミナーの目的・日本赤十字社について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害救護活動や赤十字講習、海外においても災害・紛争などの救援活動を行うなど、主に9つの活動を行っている。それらは人々のいのちを守り、苦痛を軽減することへ貢献する活動である(人道)。 <p>これまでの災害救護活動というのは、災害が起こった後に被災地へ行き被災者たちを助ける活動だったが、それだけでは救える命に限りがある。起こる前から災害によって起こる被害をできる限り小さくしたいという思いから、自分自身と家族のいのちを守る(自助)、自分自身と家族の安全が確保できたら、地域の安全に貢献する(共助)の力を高める手伝いをする活動へ力を入れている。本日のような防災セミナーも全国各地で開催している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちに求められることは何か <p>今後発生が予測される大規模地震(南海トラフ地震、首都直下地震など)、局地的大雨など気候の変化による大雨・土砂災害が起こった時に私たち自身が考え、行動に移すこと。</p> <p>〈地震からいのちを守る〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地震からいのちを守るために <p>地震発生時にとるべき行動は、まず身を守る！</p> <p>どこに避難するか？ など後のことを考えがちだが、「身を守る」ことが一番大事。</p> <p>自宅で、もしくは勤務中に地震が起こったら危ない場所はないか、土砂災害や火災の可能性がないか、考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いのちを守るには、被害を抑える、減らすための行動が必要 <p>(例)建物の耐震化や家具の転倒防止、ガラス飛散防止フィルムを貼る、 高いところに荷物を置かない。</p> <p>家の中が安全であれば、すばやく逃げられるので二次被害防止につながる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・火の始末は揺れが収まった後に 		

まず身を守る！ 火の近くにいたら距離をとり、その後に火の始末をする。

万が一出火したら、初期消火をする。

避難するときは電気とガスを止め、ブレーカーを忘れずに落とす。

・地域の力でいのちを救う

発災後自分のいのちが守れたら、地域で協力して命を守る。

いざという時に地域で助け合えるような環境を築くことが大事。

・住んでいる地域を知る

ハザードマップ(防災マップ)を確認する。

避難場所の確認する(指定された場所に避難できなかったらどうするか、災害によっては避難所として使用できない場合もある)

防災資源、危険箇所を知っておく。地震が発生する可能性はどこにでもある。平成28年熊本地震の30年以内発生確率は1%未満だった。

・地震からいのちを守るために

1 地震発生時にとるべき行動

・まずは身を守る

・揺れが収まった後に火の始末をする

2 前もって住んでいる地域を知っておく

3 いざというときに助け合えるような関係を隣近所と築いておく

〈大雨・土砂災害からいのちを守る〉

・大雨・土砂災害からいのちを守るために

地震と違い、大雨・土砂災害は天気予報や警戒情報で発生の予測がある程度できるため、早く安全な場所へ避難することが大切。

・大雨による被害

川の決壊による洪水害や降った雨の排水が追いつかず浸水害が起こり得る。土砂災害、がけ崩れ(斜面崩壊)・土石流・地すべり等も挙げられる。また、アンダーパスは冠水により使用できなくなる可能性がある。

・大雨・土砂災害からいのちを守るために

安全な場所へ早めに避難することが一番大切！ 基本は横へ避難する水平避難、間に合わなかった場合は、垂直避難を行いなるべく高い場所へ逃げる。

・住んでいる地域を知る

ハザードマップ(防災マップ)を確認する際、場所によっては川沿いや海拔が低いなど水害の影響で使用できない場合がある。それを考慮する必要がある。

・情報を正しく理解し活用する

逃げるには、災害発生の前兆現象を理解しなければいけない。災害を正しく知り、恐れ、正しい行動がと

<p>れるようにする。近年、1時間降水量80mm以上の年間発生回数は増加している。どの地域も水害が起こらないとは限らない。</p> <p>・大雨・土砂災害からいのちを守るために 早めに安全な場所に避難する！</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 住んでいる地域を知る 2 情報を理解し、活用する 3 隣近所と日頃からの付き合い <p>正しく理解することは、『自分は大丈夫・この地域は災害に遭わない』という先入観に陥らず、適切な避難にもつながる。</p> <p>〈暮らしをつなぐ〉</p> <p>・被災地での災害発生から1週間位まで 救助活動→安否確認→被害の全体像が確認できる。1週間程度だと、ライフラインが復旧しない地域が多数。電気の復旧は比較的早いですが、水道の復旧には時間がかかるので1ヶ月後も復旧できない場合がある。そのため、被災者同士の協力が重要になる。</p> <p>・家族や知人の安否確認 被災時は電話の発信や接続が制限される場合があるため、連絡手段は複数確保しておくといよい。</p> <p>・あなたが必要なものは 必要なものは個々により異なるため、自身で確認する必要がある。</p> <p>・避難先について 少人数、個別空間を確保できる避難先を選ぶことや『分散避難』を心掛けることが大切。そして、災害時は必ず避難所へ行かなくともよい。自宅の安全が確保されており建物の倒壊する恐れがなければ、ストレスの少ない在宅避難を視野にいれる。また、自宅が危険な場合でも、車中泊、被災地外への避難や宿泊施設を利用する選択肢もある。</p> <p>・これまでの日常とは全く異なる生活 住家・家財への大きな被害やライフラインの停止、不自由な避難生活によりストレスがたまる。避難所を平成30年、令和2年で比べるとコロナ対策によるパーテーション設置や人との間隔を保つ配慮がされている。</p> <p>・避難所での集団生活で意識すること 運営者、設置者だけでなく被災者自身も他の避難者へ配慮することが必要。また、運営者、設置者も被災しているかもしれないという意識を持ち、皆で協力し避難生活を乗り切ることが大切。</p> <p>・無くて困ったもの トイレが一番多く上げられる。東日本大震災の際、3日以内に仮設トイレが届いた地域は全体の三分の一に過ぎなかった。</p> <p>・過去の災害における事例</p>
--

インフルエンザ、ノロウイルスの感染症流行が懸念される。

・新型コロナウイルス感染症の対策を活用

感染症対策が普段の生活に浸透してきた。これからの避難所設営は上記を踏まえた対策を活用していく。

・集団で生活する場合の感染症対策

トイレのルールを作成し利用する。期限切れの食べ物は食中毒になりかねないので廃棄する。

・相談してルールを決めていくことが必要

災害の状況、物資の充足具合により決まるため、皆で相談してつくっていくことが大切。たばこに関しては吸う人、吸わない人、互いのストレスを考慮し喫煙所を設けた方が秩序の保たれたルールになる場合もある。ルールは状況に応じて作り、適宜変化させていく。

・相談して決めたルールを伝えよう

しっかり伝えることで余計なトラブルが減る。イラストや外国語を使用し伝え方を工夫することも大切。また、音声での伝達も効果的である。起床時間など生活のリズムをアナウンスすると皆が快適に暮らせる。

・災害時におけるリーダーの必要性

変化やニーズに応じてルールを決めるリーダーを担う人が必要。また、リーダーは公的機関からの支援活動を調整する役割も伴う。そして、自身がリーダーやリーダーに協力する立場になるかもしれない。

個人の見解だが避難所の縮小、閉鎖は非常に難しい作業のため事前に考えておくことが大切。開設時は、命を守るという同じ目標へ皆が向かうため不満も少なくスムーズに行える。しかし、避難所は本来の機能へ戻さなくてはいけないため必然的に縮小、閉鎖となる。それに伴う、避難者の集約、移動は施設提供側と避難者側で互いの要望が拮抗しとても大変である。また、丁寧に行わないと避難者の不信感や不満にも繋がる。

・暮らしをつなぐために

1 自分にしかできないことは自分で備える

・自身で想定し備えていく。

2 自分だけでは成り立たない暮らしを皆で助け合う

・いざというときに助け合えるような関係を隣近所と築いておく。

〈まとめ〉

・自助・共助・公助

まずは、自助・共助が大切！公助は、災害発生直後は規模が大きいほど期待できない。

・災害に備えるために

自助の力を高め、いのちを守ることが最重要である。助かれば、暮らしをつなげていく備えを実行する。次に、共助の力を高め、互いに支え合うことが大切になる。